

平成21年 6月 30日現在

研究種目：若手（スタートアップ）

研究期間：2007～2008

課題番号：19830078

研究課題名（和文） 社会不安を低減する向社会的行動に関する国際比較研究

研究課題名（英文） Cross-cultural study of prosocial behavior reducing social anxiety

研究代表者

笹川 智子（SASAGAWA SATOKO）

目白大学・人間学部・講師

研究者番号：20454077

研究成果の概要：

本研究の目的は、比較文化的な手法を用いて、本邦における向社会的行動の特徴と機能を記述し、それらの行動が社会不安に与える影響を検討することであった。実験室において初対面の人との会話場면을再現し、日本と比較対照国のイギリスで生じる行動レパトリーを比較した。その結果、イギリスにおいてはパフォーマンスの流暢さが社会不安に影響するのに対して、日本では相手との関係性を構築する行動が重要であることが示唆された。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,320,000	0	1,320,000
2008年度	1,350,000	405,000	1,755,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,670,000	405,000	3,075,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：社会不安, 対人不安, 向社会的行動, 社会的スキル, 比較文化, 対人交流実験

1. 研究開始当初の背景

近年、他者とうまくかかわることが困難であるために、学業や職務に支障をきたす若年層の問題が深刻化している。治療場面においては、社交不安障害 (Social Anxiety Disorder: SAD) という診断のもと、薬物療法が用いられるケースがほとんどであるが、不安症状そのものは軽減されてもなお、社会的には上手くふるまえないといった、未学習に起因する不適応が多く、事例で観察される。こうした状況を改善するに

は、心理社会的援助による抜本的な解決が必要である。

従来、未学習性の社会的不適応に対する有効な介入法として、社会的スキル訓練 (Social Skills Training: SST) が用いられてきた。社会的スキルとは、他者と円滑に交わるための向社会的行動の総称であり、SSTではこうした行動の獲得によって、対人関係場面でポジティブな相互作用を引き出す確率を高める。

しかし、本邦においては複数の SST 実践

例が存在するものの、その根拠となる向社会的行動に関する基礎研究は、ほとんどが欧米圏で得られた知見を援用したものであった。社会的スキルの研究においては、文化的背景によって各々の行動の機能が異なることが示されており、欧米で向社会的行動として受け入れられる行動が、日本でも同じ機能を有するとは限らない。SAD 研究においても、症状は社会的文脈の影響を受けるため、諸外国の SAD 患者の感じる困難さと、日本の SAD 患者の感じる困難さは異なることが指摘されている。

こうした問題点を解決するためには、比較文化的な視点のもと、本邦において社会的スキルとして機能する行動を明らかにし、得られた知見に基づいて心理社会的援助を行うことが不可欠である。そこで本研究では、対照国との比較を通じて、わが国における社会的スキルの特徴と機能を検討し、それらの向社会的行動が社会不安に与える影響を検討することとした。

なお、比較対照国としては、経済的背景や地理的条件などの面で日本と共通点が多く、文化的背景以外の交絡要因が少ないイギリスを選択した。また、調査対象としては、社会不安に関連する問題の好発期であり、二国間で研究対象者の生活形態や社会的環境が大きく異ならないと考えられる大学生サンプルを用いることとした。

2. 研究の目的

本研究では、大きく以下の3点について検討することを目的とした。

- ① 日英の対象者が日常的に経験する社会的場面の選定
- ② 選定した場面で見られる行動レポーター評価票の開発
- ③ 抽出した行動レポーターがもたらす社会不安の変化の記述

上記の点を明らかにすることによって、本邦において社会的スキルとして機能する行動を明らかにし、社会不安を低減させるための基礎的な資料の構築を目指した。

3. 研究の方法

【調査1】日英の大学生の社会不安症状の比較

(1) 目的

日英で日常的に経験される社会的場面を

選定する質的調査の前段階として、先行研究において多く用いられてきた量的尺度によって、両国の大学生の社会不安症状の比較を行うことを目的とした。

(2) 方法

対象者：

日本とイギリスの私立大学に在籍する大学生（日本：794名、男性353名、女性441名、イギリス：560名、男性117名、女性443名）

調査材料：

- ① Social Phobia Scale (SPS; Mattick & Clarke, 1998; 金井他, 2006)
- ② Social Interaction Anxiety Scale (SIAS; Mattick & Clarke, 1998; 金井他, 2006)
- ③ Taijin Kyofusho Scale (TKS; Kleinknecht et al., 1997)

手続き：

大学での講義終了後、集団式の調査として実施した。調査の実施にあたっては、対象者の権利の保護に十分に配慮し、参加の同意の得られた者に対してのみ回答を求めた。

【調査2】日英で経験される社会的場面の検討

(1) 目的

向社会的行動に関する実験を行うにあたって、大学生の多くが不安を喚起される場面として挙げ、かつ日英で経験頻度が大きく異なる社会的場面を選定することを目的とした。

(2) 方法

対象者：

日本とイギリスの私立大学に在籍する大学生（日本：170名、男性43名、女性126名、不明1名、イギリス：200名、男性55名、女性143名、不明2名）

手続き：

過去1週間のうち、社会不安の喚起された場面に関する記述を求めた。その際、場面の特徴を「日時」「場所」「その場にいた人」「出来事」と項に分けて列挙するよう教示し、記述ができる限り具体的になるように配慮した。英語で得られた回答は、日本語に翻訳した上で、両言語に精通し、心理学の専門的知識を有する者による確認を受けた。その後、日本人の臨床心理士3名が全ての回答をKJ法により分類した。生成されたカテゴリごとに、両国の対象者の回答頻度をカイ2乗検定によって比較した。

【実験1】対人交流場面における行動レパートリー評価票の開発

(1) 目的

社会不安を低減する向社会的行動を特定するために、選定された社会的場面（初対面の人との会話）において見られる行動レパートリーの評価票を作成することを目的とした。

(2) 方法

対象者：

日本とイギリスの私立大学に在籍する大学生（日本：20名、男性4名、女性16名、イギリス：20名、男性3名、女性17名）

手続き：

先の研究で選定した「初対面の人との会話」場面で見られる行動レパートリーについて調べるため、実験室で場面の再現を行った。事前に作成した実験マニュアルに基づき、訓練を受けた実験補助者1名が、対象者と15分の会話を行った。相互作用の様子はビデオに録画された。その後、行動レパートリーの抽出を行った。先行研究に基づき、社会不安と関連すると考えにくい項目を削除し、行動レパートリー評価票を完成させた。

【実験2】行動レパートリーと社会不安の変化の関連の検討

(1) 目的

実験1で抽出された向社会的行動の多寡によって、社会不安の変化にどのような影響が見られるかを検討することを目的とした。

(2) 方法

対象者：

日本とイギリスの私立大学に在籍する大学生（日本：20名、男性4名、女性16名、イギリス：19名、男性3名、女性16名）

手続き：

倫理的な配慮から、社会不安得点の高低による対象者の選択的抽出が困難であったため、調査1で使用した①SPS、②SIAS、③TKSへの記入を求め、実験対象者の社会不安レベルを確認した。その上で、実験1と同様の手続きで、「初対面の人との会話」を実験室で再現し、対象者と訓練を受けた実験補助者1名との社会的相互作用の様子をビデオに録画した。はじめに安静条件（5分）で、心拍と血圧のベースライン測定を行った。その後、実験補助者が入室し、15分の会話が開始された。その間、心拍数と

血圧の変化を2分間隔で測定し、それと同時に対象者の主観的評価による社会不安の評定（Subjective Unit of Disturbance：以下SUD評定とする）を0から100で求めた。

実験終了後、訓練を受けた3名の評定者が、録画されたビデオに基づき、行動評定を行った。心拍・血圧・SUDの測定が行われる2分間隔で、選定された12の行動がそれぞれ生じたかを評定した。評定者間一致率が十分に高いことを確認し、社会不安の増減と関連する行動を検討した。

4. 研究成果

【調査1】日英の大学生の社会不安症状の比較

調査の結果、全ての尺度において、日本の大学生の合計得点がイギリスの大学生の得点よりも高かった(TKS: $F(1, 1190)=97.03$, $p<0.001$; SPS: $F(1, 1309)=17.20$, $p<0.001$, SIAS: $F(1, 1307)=96.58$, $p<0.001$)。項目分析においても、ほとんどの項目において日本人大学生の方が高い得点を示していた。一方で、2国間で有意差および有意傾向が認められなかった項目のうち、経験頻度が比較的高かったのは、SPS6「他の人達がすでに着席している部屋に入るとき、自意識過剰になる」、SIAS8「パーティーなどで人に会うのは平気だ（逆転項目）」、TKS2「私は、人からやり方が悪いと思われただけで自分のやりたいことも止めてしまうところがある」の3項目であった。このことから、「人から注目される場面」「(社交の場で)人と会話をする場面」「人から批判される場面」は、両国ともに苦手とされる率が高く、かつ2国間で不安喚起の度合いがそれほど異なることが示唆された。

【調査2】日英で経験される社会的場面の検討

日本の大学生では138場面、イギリスの大学生では136場面の回答を得た。それぞれの回答を場面の特徴によってKJ法を用いて分類した結果、「パフォーマンス場面」、「対人交流場面」、「重症対人恐怖・妄想様観念」という3つの上位カテゴリが得られた。また、「パフォーマンス場面」はさらに「プレゼンテーション場面」「役割行動を取る場面」「失敗場面」の3つの中位カテゴリに、「対人交流場面」は「関係維持行動」「行動基準が不

明瞭な場面」「小集団場面」「その他」の4つの中位カテゴリに分類された。そして、これら7つの中位カテゴリの下に、計30の下位カテゴリが得られた(Figure 参照)。カイ2乗検定の結果、国(2)×上位カテゴリ(3)における回答の分布の偏りは有意傾向を示した($\chi^2(2)=4.85, p<.10$)。残差分析の結果、日英で体験頻度にほとんど差がなかった「対人交流場面」を実験場面として選択した。その中で、経験頻度の高さと実験室場面における再現可能性を考慮し、下位カテゴリ「初対面の人との会話」を採用した。

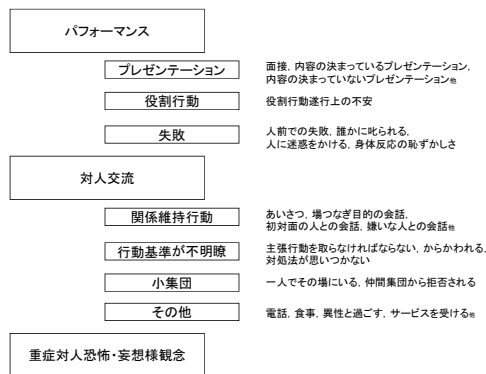


Figure KJ法によるカテゴリ分類

【実験1】対人交流場面における行動レパートリー評価票の開発

日英各20名、計40名の対人交流場面のビデオから、①客観的に観察可能であること、②特定の会話内容に特化したものでないこと、③意識的に獲得/消去することができること、の3点を条件に、計31の行動を抽出した。そのうち、特に出現頻度が高く、先行研究において不安と関連していることが示唆される12の行動を最終的な行動レパートリーとして採用した。このうち、9項目は「笑う」「視線をあわせる」「うなずく」「体をゆする」「顔をさわる」「髪をさわる」「(ボディランゲージとして)手を動かす」「服・アクセサリを触る」「ペンをまわす」の非言語的な行動であった。一方、3項目は「(相手の言葉を)繰り返す」「同意を求める」「『うーん』『ええと』など)言いよどむ」の言語的な行動であった。

【実験2】行動レパートリーと社会不安の変化の関連の検討

調査対象者の社会不安は、調査1で得られ

た各国の平均と標準偏差に照らし合わせて、ほぼ偏りなく正規分布しており、平均±0.5SDの外に位置する者の数も2国間で大きく変わらないことが確認できた。

はじめに、実験1で抽出した行動レパートリーが日英で観察される頻度に違いがあるかを検討した。15分の会話場面のうち、生理機器の測定に合わせて、2分間隔のセグメントを6つ、計12分間の相互作用を分析の対象とし、それぞれのセグメントの間に12の行動があったかをコーディングした。その結果、「笑う」「うなずく」「(相手の言葉を)繰り返す」「同意を求める」の4つの行動については日本サンプルでより多く観察され、「体をゆする」「ペンをまわす」の2つの行動はイギリスサンプルで有意に多く見られた。特に、日本人サンプルにおける「笑う」「うなずく」の頻度は非常に高く、「笑う」については6セグメント中平均5.70で観察され(イギリスでは4.79)、「うなずく」については全対象者がすべてのセグメントで行っていた(イギリスでは5.26)。総じて、日本では相手に対する同意や確認をする行動が多く、イギリスでは会話をしながら体の一部または全体を動かす行動が多くみられた。

次に、上記のセグメントごとに、心拍、拡張期血圧、収縮期血圧、SUDについて、ベースライン(5分の安静期の最後の測定を使用した)からの偏差を求めた。そして、6セグメント中いくつかで、ベースライン時よりも低い値が観測されたかを得点化した。それぞれの得点と12の行動の頻度、およびSPS, SIAS, TKS合計得点との相関を国別に算出した。

その結果、イギリスではSUDの変化に、社会不安特性の高さ(SPS, SIAS得点)が影響しており、得点が高いほど不安が下がりやすいという結果が得られた($r=0.47\sim0.55, p<0.05$)。このことは、はじめから会話場面で緊張しない人においては床効果が出やすかったことを示したものと考えられる。一方で、日本のサンプルでの相関は有意な水準に達しなかったものの($r=-0.15\sim-0.18, p>0.10$)、その関係性は逆で、社会不安特性が高い者ほど不安が下がりにくいことがうかがえた。

生理指標との関係においては、「顔をさわる」「髪をさわる」と収縮期血圧の減少に正の相関が認められた(いずれも $r=0.42, p<0.10$)。一方、主観的不安との関係において

は、「『うーん』『ええと』など）言いよどむ」とSUDの低減率の間に $r=-0.59$ ($p<0.05$)という負の相関が見られた。このことから、イギリスでは、①生理的不安反応の低減と体の動きの多さが連動していること、②言葉を流暢につなぐことが主観的不安に大きく影響していること、が示唆された。

日本においては、収縮期血圧の減少とSUDの低減に有意な正の相関が認められた ($r=0.61$, $p<0.01$)。また、「髪をさわる」と拡張期血圧の減少の相関が有意であった ($r=0.45$, $p<0.05$)。「ペンをまわす ($r=0.59$, $p<0.01$)」「同意を求める ($r=0.55$, $p<0.05$)」はSUDを低減するのに有効であった。このことから、①日本人サンプルではイギリス人サンプルに比べて、生理的反応が主観的不安と強く連動していること、②イギリスの場合と同様に、生理的不安反応の低減と体の動きの多さが連動していること、③流暢に言葉をつなげることよりも、相手に対して同意を求め、反応を確認できることの方が、社会不安の低減に有効であることが示された。

総じてイギリスでは、相手にわかりやすく流暢に自分の意図を伝えることが重視されるのに対して、日本では相手の反応を確認し、話し手・聞き手の考えに大きな隔たりがないよう会話を構築していくことが重要であると考えられた。このことは、「笑う」「うなづく」の行動の出現率が日本人サンプルで非常に高く、文脈にほとんど影響されず観察される関係維持行動である点や、SUDの変化が社会不安特性の影響を受けず、状況依存的な変化を示す点からも覗えた。

従来型のSSTでは、「視線を合わせる」「声の大きさを調整する」など、自分の意図を伝えるための送信スキルを訓練する場合がほとんどであった。しかし、本研究の結果から、本邦において社会不安を低減する行動は、むしろ「同意を求める」など、相手の反応を確認し、相手との良好な関係性を結ぶような行動であることが示された。今後は、臨床場面においても文化的背景を十分に考慮し、会話場面で機能する行動のトレーニングを確立することが課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計10件)

- ① Essau, C. A., Sasagawa, S., & Ollendick, T. H. (in press). The facets of anxiety sensitivity in adolescents. *Journal of Anxiety Disorders* (査読有).
- ② 笹川智子, 高橋史, 赤松亜紀, 嶋田洋徳, 野村忍 (印刷中). 日本の児童生徒における社会不安の特徴: Social Phobia and Anxiety Inventory for Children (SPAI-C) を用いた検討 心身医学 (査読有).
- ③ Kanai, Y., Sasagawa, S., Chen, J., Suzuki, S., Shimada, H., & Sakano, Y. (in press). Negative interpretation of bodily sensations in social anxiety. *International Journal of Cognitive Therapy* (査読有).
- ④ 城月健太郎・笹川智子・野村忍 (2009). スピーチに関する見積もりが社会不安に与える影響 心理学研究, 79, 490-497 (査読有).
- ⑤ Ishikawa, S., Sato, H., & Sasagawa, S. (2009). Anxiety disorder symptoms in Japanese children and adolescents. *Journal of Anxiety Disorders*, 23, 104-111 (査読有).
- ⑥ 笹川智子, 金井嘉宏, 陳峻雯, 嶋田洋徳, 坂野雄二 (2008). 児童期のレトロスペクティブな行動抑制傾向測定尺度 (The Retrospective Self-Report of Inhibition) 日本語版の開発 行動療法研究, 34, 285-295 (査読有).
- ⑦ 岡島義・金井嘉宏・笹川智子・金澤潤一郎・秋田久美・陳峻雯・坂野雄二 (2008). Social Phobia and Anxiety Inventory 日本語版の開発 行動療法研究, 34, 297-309 (査読有).
- ⑧ 石川信一・美和健太郎・笹川智子・佐藤寛・岡安孝弘・坂野雄二 (2008). 日本語版 Social Phobia and Anxiety Inventory for Children の開発の試み 行動療法研究, 34, 17-31 (査読有).
- ⑨ 金井嘉宏・笹川智子・陳峻雯・嶋田洋徳・坂野雄二 (2007). 社会不安障害傾向者と対人恐怖症傾向者における他者のあいまいな行動に対する解釈バイアス 行動療法研究, 33, 97-109 (査読有).
- ⑩ 城月健太郎・笹川智子・野村忍 (2007). ネガティブな反すが社会的不安傾向に与える影響 健康心理学研究, 20,

42-48 (査読有).

[学会発表] (計7件)

- ① 城月健太郎, 笹川智子, 野村忍 社会不安の解釈バイアスが不安・回避・生理的反応の認知に影響するプロセス 日本認知療法学会 2008年11月3日 日本教育会館, 学術総合センター
- ② 城月健太郎, 笹川智子, 野村忍 ビデオフィードバックにおける認知的介入がスピーチ課題の自己評価と否定的見積りに与える影響 日本心身医学会 2008年6月13日 札幌コンベンションセンター
- ③ 笹川智子, 野村忍 児童青年期の社会不安に対する教員の意識調査 日本行動療法学会 2007年11月30日 神戸国際会議場
- ④ 笹川智子, 佐藤寛, 井上敦子, 嶋田洋徳 児童青年期における自動思考と不安症状の関連 日本カウンセリング学会 2007年11月24日 琉球大学
- ⑤ 城月健太郎, 笹川智子, 野村忍 スピーチに対する見積もりが社会不安に与える影響 日本心理学会 2007年9月18日 東洋大学
- ⑥ 笹川智子, 陳峻雯, Essau, C. A., 坂野雄二 Familial background in the development of social anxiety and Taijin Kyofusho 2007年7月
- ⑦ 城月健太郎, 笹川智子, 野村忍 The effects of video feedback with cognitive intervention on the image of video in socially anxious individuals World Congress of Behavior and Cognitive Therapies 2007年7月

[その他]

- ① Sasagawa, S. & Essau, C. A. Social Phobia in Eastern and Western societies: Distinctive patterns in the manifestation of anxiety symptoms 2009年2月20日 Roehampton University (研究成果に関するシンポジウム)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

笹川 智子 (SASAGAWA SATOKO)

目白大学・人間学部・講師

研究者番号: 20454077

(2) 研究協力者

CECILIA A. ESSAU

Roehampton University・School of Human and Life Sciences・Professor

城月 健太郎 (SHIROTSUKI KENTARO)

早稲田大学・大学院人間科学研究科・博士後期課程